

被災地を



東日本大震災で発生した津波は、東北地方の漁港や水産加工施設などに壊滅的な被害をもたらした。漁師たちから船を奪った。岩手県沿岸部の大槌町でボランティア活動を続けてきた横浜市瀬谷区の板金建築工事会社経営、露木晴雄さん(31)の写真は、漁師たちが再び豊かな三陸の海で漁に出られるよう、約束を果たすため奔走している。



「被災地はとにかく困っている。何かしなければ」。震災発生後、東北の惨状がニュースで繰り返し映し出され、胸が締め付けられた。昨年3月31日深夜、同志の職人仲間13人で、知人のつてを頼りにトラック5台を連ね、岩手県に向かった。積み荷は「瀬谷の農家の野菜や地元の商品販売店で集め

漁師への支援

⑤

た食材が中心。調理用の大鍋は近所の幼稚園で借りた。夜通し車を走らせて翌日午前、岩手に到着。「沿岸部に支援が行き届いていないので」との情報を頼りに、初め



岩手県大槌町で炊き出しを行う露木さんらのボランティアグループ —平成23年6月28日

「瀬谷丸」購入へ資金募る

魚を食べたい

想像するだけ。わずかにホームが残っていて、JR大槌駅の所在地は分かった。同町では津波で町長を含め死者、行方不明者は1千人以上上った。

露木さんのグループは、難を逃れた住民が避難していた高台の小学校で、1千人分の温かいカレーや豚汁の炊き出しを行った。被災者は漁師や漁業関係者とその家族が多数。交流が深まると、「俺たちは漁師だから、できれば魚を食べたい」。本音が漏れてきた。

その後は、持ち出しや瀬谷駅前などでの募金活動で集めた資金を元に被災地の要望に応え、イワシやアジなども提供した。「昨年6月には、冷凍車とドライアイスを使って刺し身300人分を運んで、大歓迎を受けた」。大槌町での活動は1年間で5回にわたった。

昨年10月には横浜・瀬谷で

漁師ら被災者を招き、郷土料理を振る舞うイベントを開催した。大槌町からは「はらこ飯(イクラ丼)」や「あら汁」、露木さんらは好物の「ホルモン焼き」を出品。売上金を義援金とし、イベントは盛況のうちに終わった。

船がほしい

「横浜で地震が起きたら助けに来るぞ」。その日の晩、打ち上げが行われた居酒屋に約20人が集まり、近況などを語り合い盛り上がった。宴席が終了する頃、今ではすっかり「ター坊」の愛称で親しまれている60代の漁師が涙をこらえ、「やっぱり漁がしたい。船がほしい」と胸の内を明かした。

大槌町はサンマなどの定置網漁やワカメの養殖が盛ん。定置網漁船の購入には約2億円が必要という。ター坊は「国から1億7千万円の補助は出るが、残り3千万円が工面できない」と話す。露木さんらは資金集めを決めた。購入の際には「瀬谷丸」と名付けてほしいと申し出ると、快

諾された。今年の元日には、「三陸沖に瀬谷丸を！実行委員会」の準備委員会を設立。露木さんらの呼びかけで、地元企業、商店街、医療関係、各校のPTA、地元選出議員…支援の輪は広がった。

大槌町の漁師たちは苦闘を続けていた。1月13日、大槌町漁協が約11億円の負債を抱えて経営破綻。しかし、漁協は今年1日、組合員数はこれまでの5分の1程度の約170人と大幅に縮小したものの、「新おおつち漁協」の名称で再スタートした。

漁の復活に向かって活動を本格化させている漁師たちを後押ししようと、露木さんらは今年25日、地元・瀬谷で資金集めのフリーマーケットを開催。今後も活動を続ける決意だ。

「漁師さんたちが仕事を再開できることが復興だ。瀬谷丸が取った魚を瀬谷に運んでもらい、横浜市民に振る舞ってくれる日を楽しみにしている」。漁の復活を願ってやまない。(尾島正洋)